

秋田県文化財調査報告書第170集

国道103号大館南バイパス建設事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査概報

—— 山王岱遺跡 ——

1988・3

秋田県教育委員会

## 序

埋蔵文化財の発掘調査は県内各地で行なわれ、我々の郷土の歴史のありのままの姿が、徐々にではありますが解明されつつあります。

国道103号大館南バイパス建設事業は、大館市から鹿角市に通ずる国道の交通混雑の解消などを目的に計画されたもので、その一部大館市山館～十二所間は、すでに供用されております。この度、これに接続する大館市山館～片山間を結ぶ路線が決定し、工事に先立ち本年度、上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡、山王岱遺跡などの発掘調査を実施いたしました。本書はこのうち山王岱遺跡の調査概要をまとめたものであります。

調査の結果、縄文・平安時代の遺構・遺物とともに、時期不明ではありますが、中世に属すると推定される火葬墓・空堀跡などが検出されました。中世の火葬墓は県内初見のものであり、該期の研究に寄与するものと考えられます。

最後に、本遺跡の発掘調査・概報作成にあたりご協力いただきました関係各位・機関に対して感謝の意を表しますとともに、本書が郷土史解明、埋蔵文化財保護のために広く活用されることを希望します。

昭和63年3月25日

秋 田 県 教 育 委 員 会

教育長 齋藤 長

# 例 言

1. 本書は、国道103号大館南バイパス建設事業に係る山王岱遺跡の発掘調査概報である。
2. 山王岱遺跡の発掘調査は、昭和62年度に調査予定区の東側部分を実施したが、昭和63年度以降には残る西側部分が行なわれる予定である。このため、本年度は調査報告を概報とし、昭和63年度調査分も合わせて本報告を行う予定である。
3. 本書の執筆は、学芸主事大野憲司が行った。
4. 本遺跡の発掘調査、概報作成に当たっては下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。

国立歴史民俗博物館教授 吉岡康暢 同助教授 阿部義平

大館市企画室市史編纂係主任 板橋範芳 鹿角市教育委員会社会教育課主任 秋元信夫

# 目 次

序

例言

1. はじめに .....	1
(1) 調査に至る経過 .....	1
(2) 調査の組織と構成 .....	1
2. 遺跡の位置と立地 .....	1
3. 調査の方法と経過・土層 .....	3
4. 検出遺構と出土遺物 .....	6
5. まとめ .....	17

## 1. はじめに

### (1) 調査に至る経過

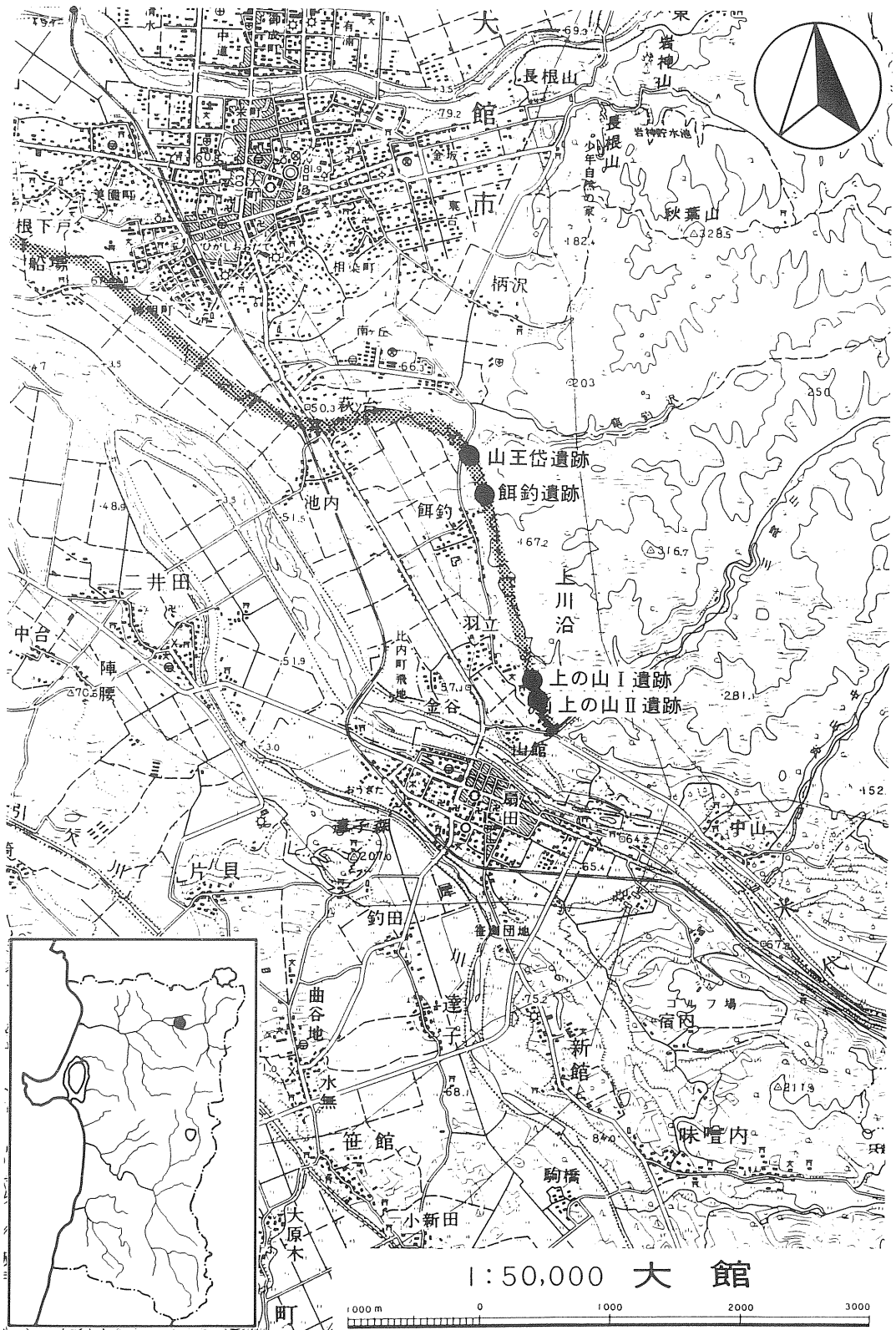
国道103号大館南バイパス建設事業は、大館市山館～十二所間が既に終わり供用されているが、大館市片山～山館間の全長7,677mについては未着工である。この予定路線は、山館から萩野台までは東側の山地から連なる台地上を通り、萩野台より北西部では市街地を避けて沖積地を通して片山の台地上に通ずるものである。路線のうち山館から萩野台に至る間は、標高70～90mの段丘縁辺部にあたり、昭和60年度の分布調査では7遺跡の存在が判明している。またこのうち昭和61年度には上ノ山Ⅰ・Ⅱ・餌釣・山王岱遺跡の4ヶ所について範囲確認調査が行なわれた。範囲確認調査の際、山王岱遺跡については、遺跡と推定される範囲の東側部分だけが行なわれ、今回もその部分のみの調査が実施されたものである。なお、残る西側部分については昭和63年度以降に発掘調査が実施される予定である。

### (2) 調査の組織と構成

所在地	秋田県大館市餌釣字山王岱3番地、外
調査期間	昭和62年5月6日～7月14日
調査対象面積	3,890m <sup>2</sup>
調査面積	3,450m <sup>2</sup>
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	大野 憲司（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
調査総務担当者	加藤 進（秋田県埋蔵文化財センター主査） 高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関	秋田県土木部北秋田土木事務所 大館市企画室史編纂室 大館市社会福祉協議会

## 2. 遺跡の位置と立地

遺跡は、JR東日本奥羽本線大館駅の南南東4.3～4.5kmに位置し、大館市街地の南東側に広がる標高70～80mの台地群のうち、最も南の台地上に立地する。遺跡の所在する台地の東側は餌釣沢によって開析され、西側は池内方面に続く沖積地となっている。このため、平面的には、



第1図 山王岱遺跡の位置

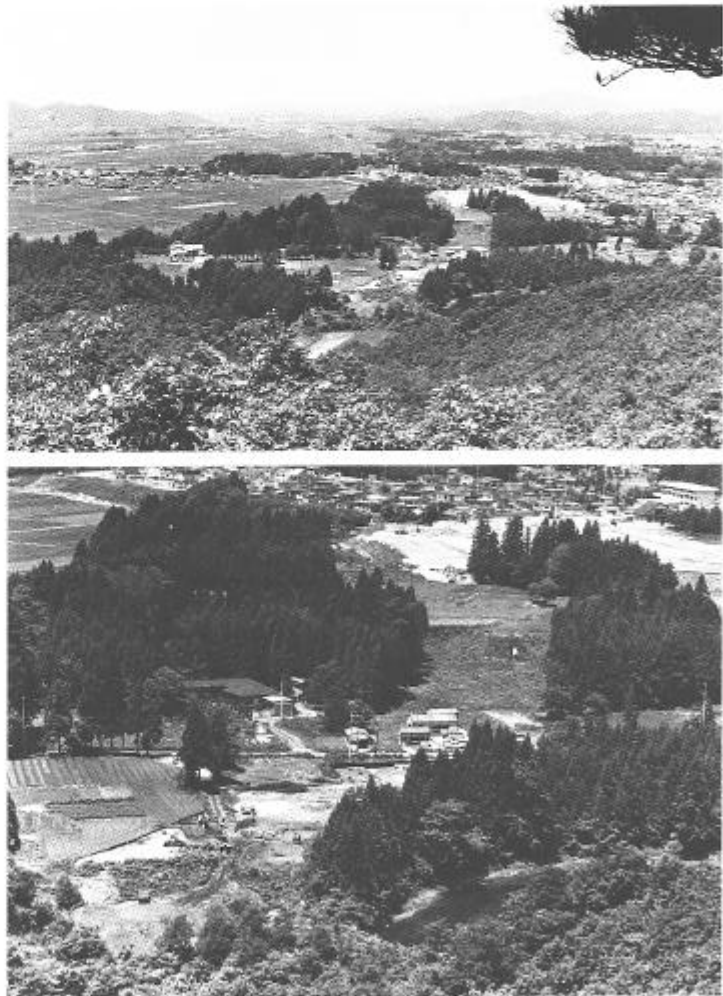


南に突き出た半島状を呈する台地上の、西縁近くに日吉神社が鎮座するが、神社の東～北側には大きな空堀跡が残存している。このため「秋田県の中世城館」においては、この部分を「餌釣館」の範囲としている。しかしながら今回の調査結果では、上記空堀跡以外に3条の空堀跡が検出されており、「餌釣館」の範囲はさらに拡大するものと思われる。

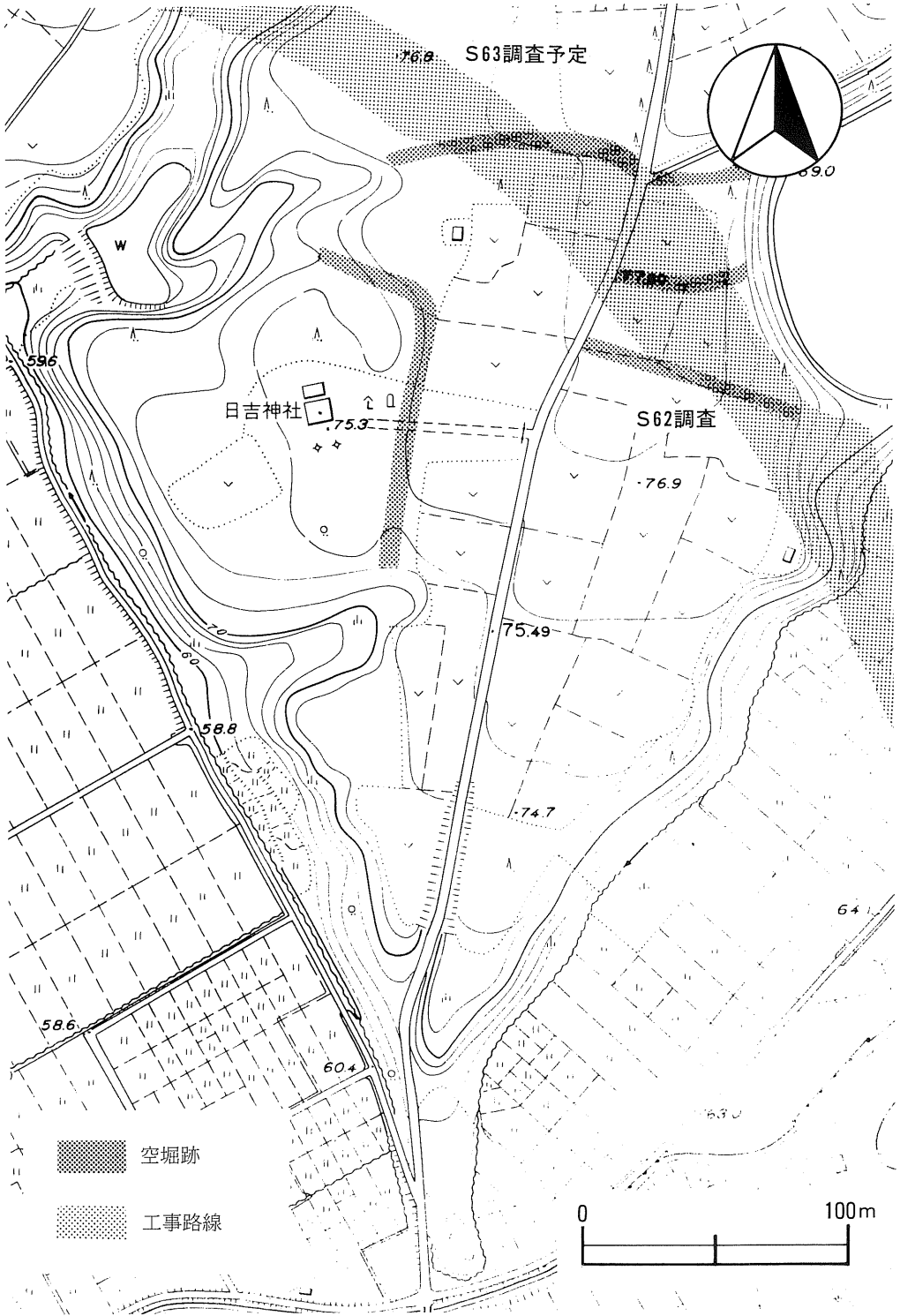
### 3. 調査の方法と経過・土層

発掘調査は、計画路線の中心杭No120を基点とし、これを通る真北線を求め、4m×4mの方眼杭を打設してのグリッド法に拠った。方眼杭には、東西方向にL A・L B……L S・L T・M A・M B……M S・M Tとアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には、南から北に向かって昇順となる連続した2桁の数字をあて、その両者を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に囲まれたグリッドの名称は、その南東隅に位置する杭のアルファベット・数字の組み合わせをあてている。基点であるNo120中心杭をM A 50とした。

調査は5月6日から諸準備に入り、プレハブ事務所の設置、排土運搬車、ベルトコンベアーの到着を待って、8日から粗掘りを開始した。粗掘りは調査区南端から始めたが、畑の耕作土である黒褐色土を20～30cm除去すると直ぐ地山土である段丘砂礫層に達する。柱穴様の小ピットが検出されるも、建物プランとすることのできるものはない。5月12日、調査区南部を東西に通る農道の南側に2本のトレンチを入れたところ、空堀跡であることが判明したのでこれをS D 01とする。5月14日、ベ



第2図 1:山王岱遺跡全景 2:調査区全景(東▷)



第3図 「餌釣館」空堀跡と調査区

ルトコンベアーの設置を行い、調査区北部からの粗掘りを開始する。早速に、焼土を伴う土坑 S K 04が、さらに同15日には、S K 04の北東から同様の土坑が検出されたが、長方形の長軸に直交するような張り出し部(溝状部)が伴っているので、これをS X 05とする。5月18日までに、この周辺で溝状遺構などを検出したが、遺物はほとんど出土していない。5月27日までに、調査区北端にある空掘跡S D 09と、やや中央寄りにある空掘跡S D 10の間の粗掘り、一部精査を終える。この間には、S E 12井戸跡、S K 08土坑などから土師器が若干出土したのみで、遺物は相変わらず少なく、各遺構の年代推定を困難にしている。また、S X 05は精査中に人骨が検出された。時期は不明だが火葬墓のようで、S K 04・13も同様と考えられ、S X 04・13とする。S D 10は調査前の現状から帯状の浅い窪地となっており、空掘跡と考えられていたものであるが、調査の結果、予想以上に浅い空掘跡であることが判明する。S D 10以北の諸遺構の精査・実測を進める一方、その南側の粗掘り・遺構検出に努めたが、6月13日に至っても明確な遺構らしい遺構を検出できない。6月27日までに、調査区南東部から平安時代の土坑S K 25と縄文時代後期の竪穴住居跡S I 28を検出し、S D 01の全面掘り下げを継続する。7月11日までに検出した遺構の精査・実測・写真撮影をほぼ終え、同14日までに補足の調査を行って、今回の発掘調査の全てを終了した。

本遺跡は、畑地として利用されていたために、地山上面まで達するような削平を受けている場所がある。特に調査区中央部は、黒土採りのため重機で地山直上まで削平され、地山段丘礫層などがむき出しのところもある。そのような中であって、基本土層図である第6図は調査区北部M B 59付近のものであるが、本来あったと考えられる層序を示している。第1層は黒褐色の耕作土で、細かい軽石をまばらに含む。第2層は赤黒



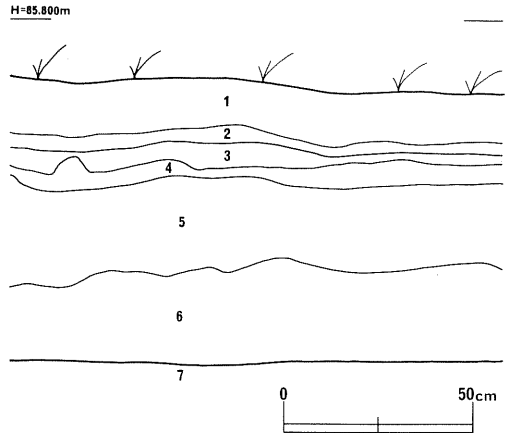
第4図 発掘調査前の状況(南東▷)



第5図 発掘調査風景



色土で、粒径0.5～1 cm未満の軽石を弱い霜降り状に含む。第3層は黄褐～極暗赤褐色の火山灰(軽石)層である。これが大湯浮石層であると考えられる。所々厚さ10cm近くに堆積している部分も見られるが、平坦部においては痕跡程度にしか残っていない。第4層は見た目にはチョコレート色を呈する黒褐色土である。軽石は含まず、よくしまっている。第5層は黒褐色土で、いわゆる黒ボク土である。縄文土器がこの層の上部あたりに散見される。第6層は極暗褐色の地山漸移層である。第5層との境目が強く波打っている。第7層は黄褐～明黄褐色の地山土である。地山土は場所によって、粘質土であったり砂質土であったり礫層だったりして、一様ではない。



第6図 基本土層図

#### 4. 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、縄文・平安・時期不明に分けられ、その内訳は以下のとおりである。

##### 縄文時代

竪穴住居跡 2軒 (S I 27・30) フラスコ状土坑 1基 (S K F 29)

##### 平安時代

土坑 3基 (S K 08A・B・25) 竪穴状遺構 1基 (S K I 19)

##### 時期不明 (中世に属する可能性が強い)

空掘跡 3条 (S D 01・09・10) 溝状遺構 2条 (S D 06・07)  
 井戸跡 1基 (S E 12) 竪穴状遺構 1基 (S K I 21)  
 火葬墓 3基 (S X 04・05・13) 被火骨出土遺構 4基 (S X 14・15・16・26)  
 土坑 2基 (S K 11・24) 柱穴多数

出土遺物は少なく、まして遺構内から出土した遺物は微量である。遺物は全て土器で、縄文平安時代のもの、2点のみ中世末頃の陶磁器の破片がある。

以下、検出した遺構と遺物について、主なものの概略を述べる。

## 縄文時代

縄文時代の遺構は、調査区中央～東部にかけて時期の異なる3遺構が検出された。遺物は土器を中心にして、調査区ほぼ全体から少量ずつ出土している。

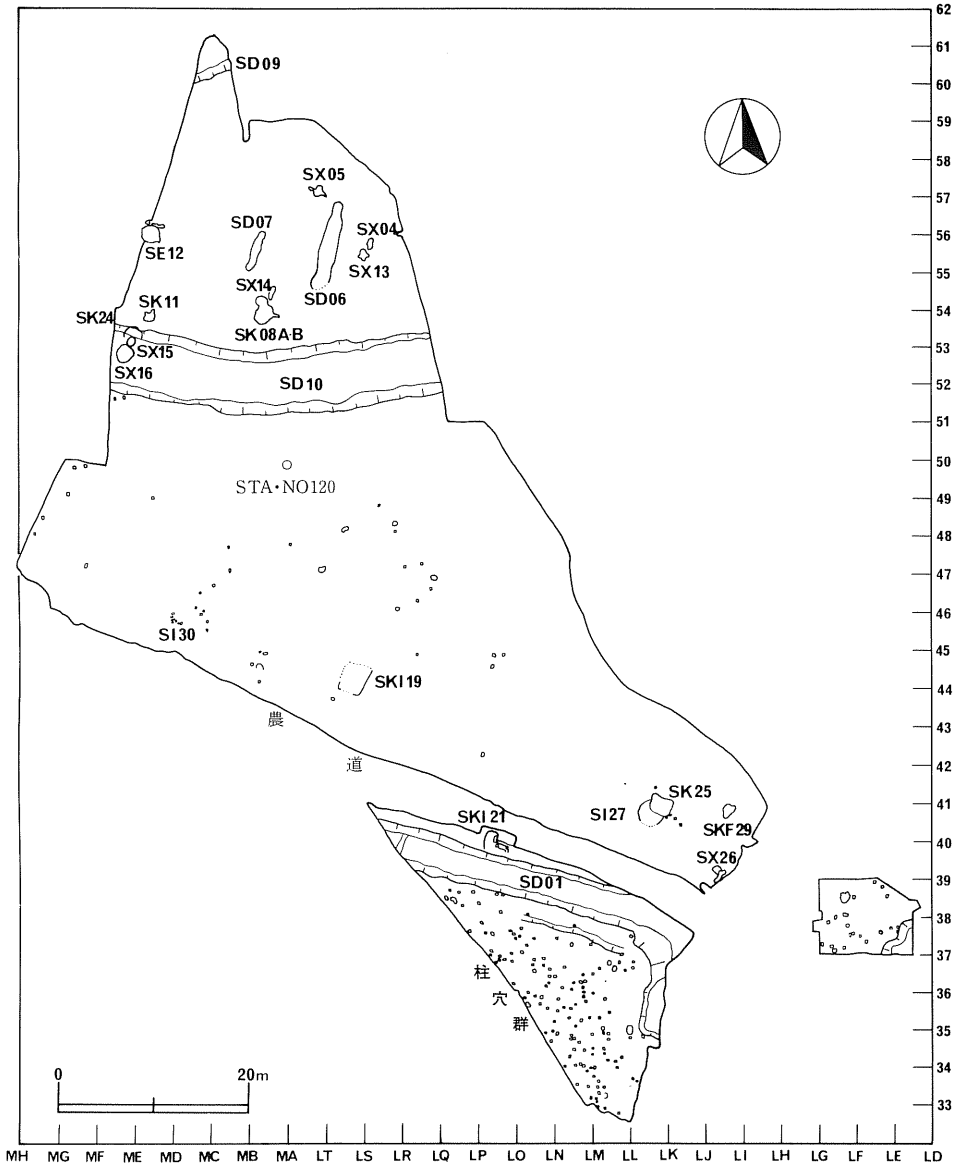
**S I 30竪穴住居跡** 調査区中央西側に位置する。地山直上で石囲炉のみを検出した。石囲炉は長径1.4mの楕円形を呈するようで、その半周分が残っていた。炉内側と石囲炉に使用された河原石が焼けている。地山礫層を掘り込んでいるのは炉部分のみのようで、緩いすり鉢状に落



第7図 調査後の全景 1:(南東▷) 2:(北西▷)

ち込んでいる。全体のプラン・柱穴は確認できなかった。石囲炉の近くから中期後葉と考えられる土器片が出土しているため、該期のものであろう。

**SI 27 竪穴住居跡** 調査区南部東側で検出された。平面形は長径2.4～2.7mの略円形を呈するが、北東側は平安時代の土坑SK 25によって切られていて不明である。床面は地山面を15cmほど掘り込んでいて略平坦であるが、地山礫があちこちに出ており、たたき締められた状況にはない。地床炉が、床面中央やや北東寄りにある。柱穴を床面から2個、住居外から3個検出しているが、本住居跡に伴うものか否かわからない。壺形土器(第27図)が南西壁近くにほぼ正



第8図 グリッド配置と遺構配置図

立していた。この土器の時期などから、本住居跡は後期後葉のものと考えられる。

**SK F29フラスコ状土坑** 調査区南部東端、台地の縁近くにあり、S127の東にあたる。口径約1.1m、底径約1.4m、深さ0.6mで断面形がフラスコ状を呈する。埋土中から第28図の晩期前葉の鉢形土器が数片に分かれて出土した。この土坑の時期も、土器と同じものであろう。

#### 平安時代

確実に平安時代の遺構と考えられるものは4基のみで、調査区中央部に近い。平安時代の遺物は調査区中央から北部にかけて散発的に出土したが、遺構埋土中からのものが多い。

**SK08A・B土坑** 最初、焼土を伴う1基の土坑として検出されたが、精査の結果2つの土



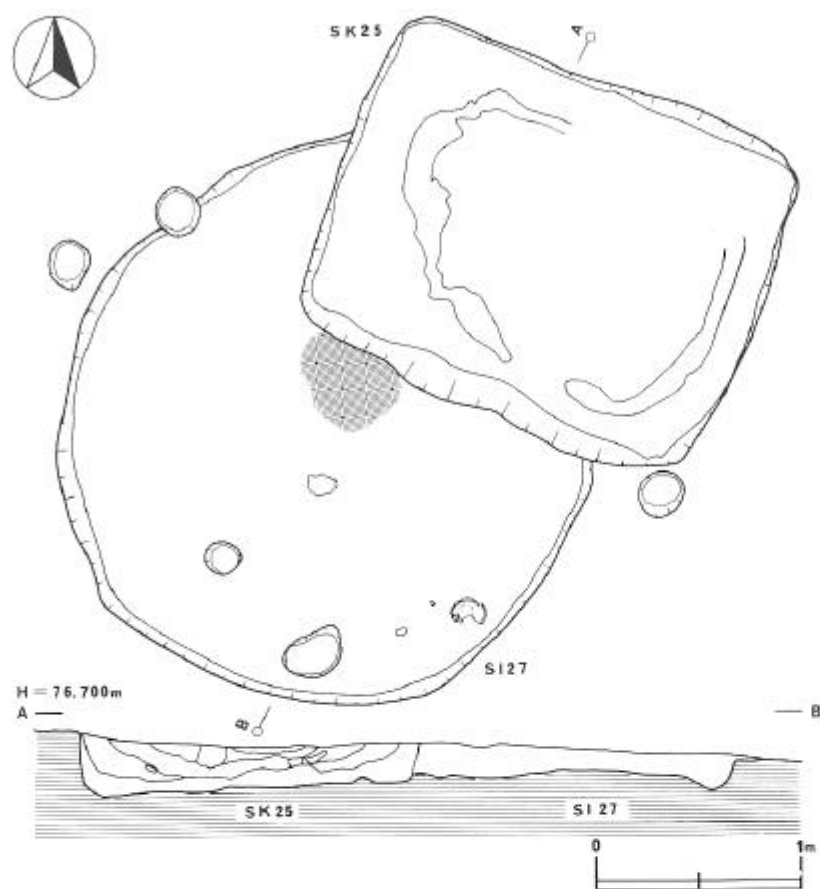
第9図 S130竪穴住居跡の石囲炉(北東▷)

坑の切り合いとわかったものである。浅いすり鉢状の掘り込みで、Aは楕円形、Bは略隅丸長方形を呈する。木炭と土師器杯・甕形土器片を埋土中に含み、床の一部や壁が焼けている。

**SK25土坑** 調査区南部東側でS127を切っている土坑である。長さ



第10図 S127竪穴住居跡とSK25土坑(北東▷)



第11図 SI27竪穴住居跡, SK25土坑



第12図 SK08A・B土坑(北▷)

2.15m、幅約1.7mの長方形を呈し、0.25mの深さを有する。確認面で図のように、楕円形を描くように灰白色の火山灰を認めた。白頭山起源の火山灰かと思われ、埋土上部に堆積している。埋土中から縄文土器と土師器甕形土器片が出土した。

#### SK119竪穴状遺構

調査区中央部で検出したが、この部分は土取りによる攪乱が激しく全体のプラン等は明確にできなかった。3.0m×2.5m前後の略長方形を呈する可能性がある。カマド等は検出で

きなかったが南東隅に焼土があり、ここから土師器甕形土器の細片を得ている。

#### 時期不明遺構

時代・時期を特定できない遺構が合計16基と、柱穴多数がある。これらの埋土中から遺物が出土していないためであるが、このほとんどは中世に属する遺構かと考えられる。

SD01空堀跡 調査区南



部を横断する農道の南側に接して構築された空堀跡である。この部分には、台地東縁から小さな沢が入っており、一部それをも利用するような形で作られたものであろう。総延長35mを検出したが、西側は日吉神社方向に向かって延びるものと思われる。上幅約4.0~4.5m、下幅約2.5m、深さ1.2mで断面形は逆台形を呈する。底面は略平坦であるが、地形に沿うような形で東側に行く程深くなる。西側で底面が約0.3mほど高くなっている部分がある。

**SD09空堀跡** 調査区北端にある空堀跡で、ごく一部を検出した。幅等は不明であるが、現地形からすると、上幅は6m前後あるものと考えられる。深さは現地表面から1.3mであり、全体にSD01を少し大きくしたくらいのものであろう。調査区外であるが、本空堀跡の東側には土塁状の高まりが残存している部分もある。

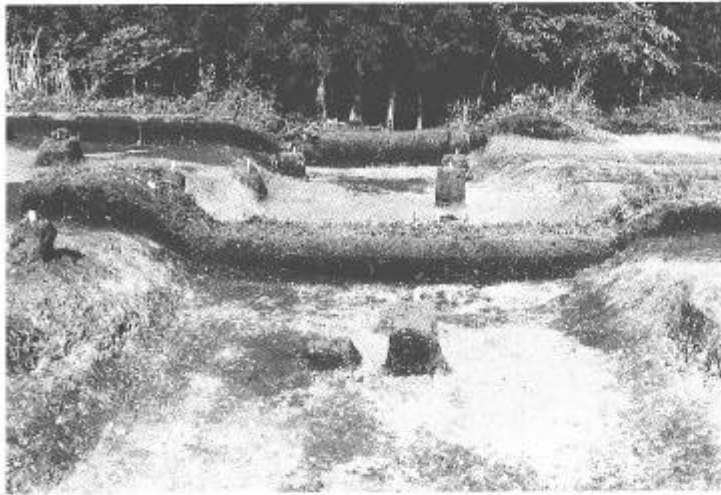
**SD10空堀跡** 調査区中央北部を横断する形で検出された。調査前の状況で両側に小さな土堤状の高まりが残っており、空堀跡と判断できたものであるが、掘ってみたら存外に浅いものであった。上幅約7m、下幅約5mで、深さは約1.3mである。西端部底面に



第13図 SD01空堀跡土層断面(東▷)



第14図 SD01空堀跡 1:(東▷) 2:(西▷)



第15図 SD10空堀跡(西▷)



第16図 SD10空堀跡(西▷)



第17図 SE12井戸跡 1:(北▷) 2:(東▷)

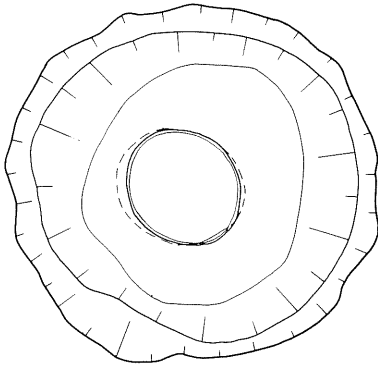
S X 15・16被火葬骨出土遺構があるのでは、これらの遺構が構築される時には、空堀としての役割を果たしていなかったものであろう。

**SD06・07溝状遺構** 調査区北部に位置し、略南北を指す遺構である。断面形は浅いすり鉢状を呈する。

**SE12井戸跡** 調査区北部西端にある井戸跡である。確認面での直径1.85～1.95m、底径1.15～1.25mの略円径を呈し、深さは約2mである。地山段丘礫層を掘り込んでいるが、現在、水は出ない。坑下部中央に直径60cm、高さ53cmの曲物を正立させている。埋土は人為的に埋められた状況を呈し、土師器甕形土器の細片など数点が出土した。平安時代の井戸跡かもしれない。

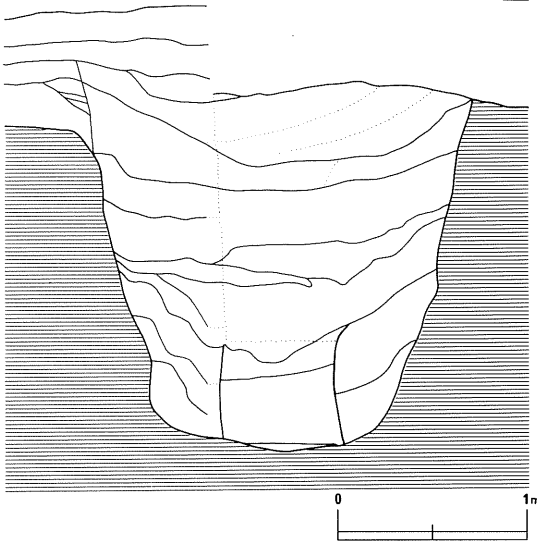


A ○ —



H = 78.000m

A —



第18図 SE12井戸跡

SKI 21 竪穴状遺構 SD01によって、南側大部分が切られている浅い竪穴状の遺構で、出入口のある竪

—○B 穴住居跡の可能性もある。

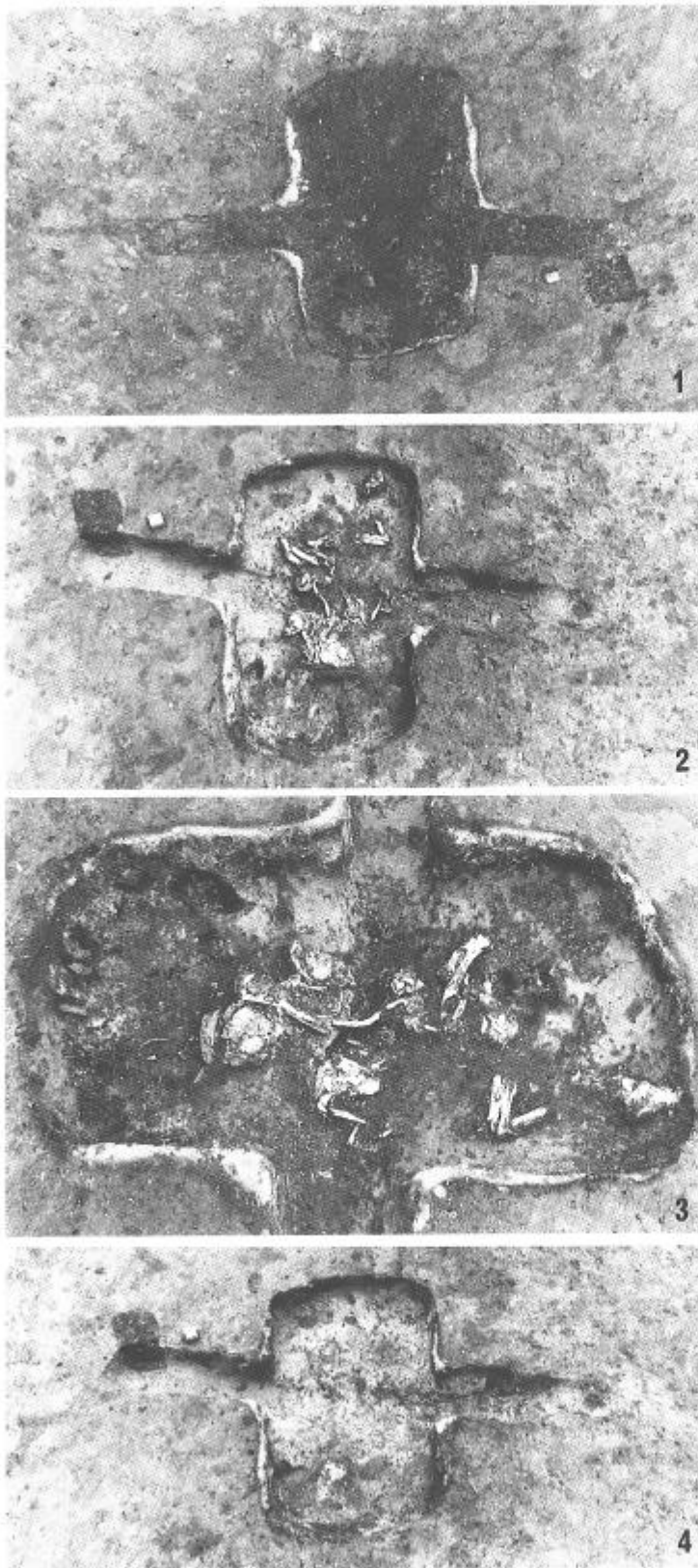
SX05 火葬墓 調査区北部で検出された3基の火葬墓のうち、最も遺存状態の良かったものである。平面形は隅丸長方形（長軸1.25m×短軸0.

— B 75m)を呈する。確認面からの深さは17cmで、底面から壁面にかけて非常によく焼けている。また、長軸に略直交して、幅15cm、深さ0~22cm、長さ2mの溝が取り付いている。壙と溝の交わる部分においては溝の方が深く、その壁も良く焼けている。人骨は頭部を北に、足を南にした横臥屈葬の形を取っている。残っている骨の大きさからして成人のものと思われるが、男女の区別はつかない。人骨の下及び周囲に炭化した木の枝や炭が多く見られ、壁面にもワラ灰

状の痕跡があったことから、この人骨は、この壙の中で火葬され、そのまま埋められたものと考えられる。この工程を推定してみると、①~⑤のようになるものと思われる。①隅丸長方形の土壙と、これに直交するような溝を掘る（溝が土壙と重なる部分では、溝を深くする）。②壙底に薪木を並べ、壁にはワラなどを置く。③遺体を薪木の上に安置する。④薪木に火を放ち茶毘に付す。⑤燃え終えた後に周囲にある土を埋める。SX03・04も含めて副葬品等は全く出土していないが、火葬墓の上面は畑の耕作によって削平されており、上部に何らかの副葬的な遺物があったとしても、移動されてしまっているものと思われる。

SX04・13 火葬墓 SX05の東側に位置する。2基とも人骨等の遺存状態は良くないが、SX05と同様の火葬墓である。

SX14 被火骨出土遺構 調査区北部で検出された溝状遺構の中に火熱を受けたと思われる骨が、一塊りとなって出土した。溝状遺構は、長さ1.6m、副0.35m、深さ0.2mであるが底面及び



第19図 SX05火葬墓 1・2・4:(北▷) 3:(西▷)

壁面は焼けておらず、この中で火を焚いた跡はない。

#### S X16被火骨出土遺構

S D10空堀跡の底面西端でS X15と隣り合って検出された。平面形は径約1.8mの円形を呈する。中央部径約1mの円の中から骨が炭化物と一緒に出土するが、この部分は浅く凹んでおり、底面ほど炭化物が多い。この底面など若干火熱を受けた痕跡もあるが、出土した骨がここで焼かれたのか、他所で焼かれたものが、炭化物と一緒にここに移動されて埋められたものか判然としない。骨と炭化物が出土する範囲の外周は20~25cmの浅い溝状になっている。出土した骨には大型のものは少なく、細片が多い。

#### S X15被火骨出土遺構

S X16の北東側に接しているが新旧関係は不明である。やはり骨が木炭・焼土と一緒に約25cmの厚さで出土している。やはりS X16と同じで、出土した骨に大型のものは少なく、細片が多い。

#### S X26被火骨出土遺構

調査区南部東端の台丘縁辺に位置する。緩い斜面にあり

遺存状態は良くないが、骨が若干出土しており、竈底面や壁の一部が焼けているので、あるいは、S X 05などと同様の火葬墓である可能性がある。

S K 11・24土坑 S X 15の北側 S D 10の壁面及びその上部で検出された。全体の形状は攪乱などで判然としない。

柱穴群 調査地区南部S D 01空堀跡の南側で、他の部分では見られないくらい多く柱穴が検出された。地山段丘礫層を掘り込んでおり、プランの判然としないものもあるが、おおよそは、径あるいは一辺が20～40cmの柱穴で深さは10～30cmのものが多い。掘立柱建物跡になるものもあると思われるが、未だそのプランを確認していない。

#### 出土遺物

出土遺物で、おおよその形に復原できたものは第26～28図の3点のみである。26はS I 27竪穴住居跡の床面に正立していたもので、縄文時代後期中葉の壺形土器であろうか。27はS K F 29フラスコ状土坑内の埋土中から出土した破片が接合したものである。この出土状況からすれば、この土器は、土坑が埋められる際はほぼ1個体あったものがバラバラになってしまったものと考えられる。縄文時代



第20図 SX04・13火葬墓(東▷)



第21図 SX04・13火葬墓(南▷)



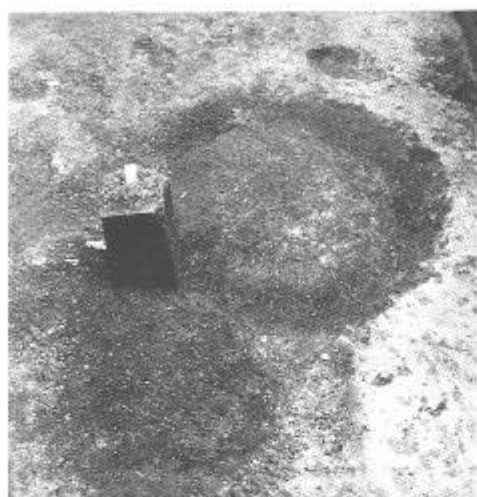
第22図 SX04火葬墓(東▷)



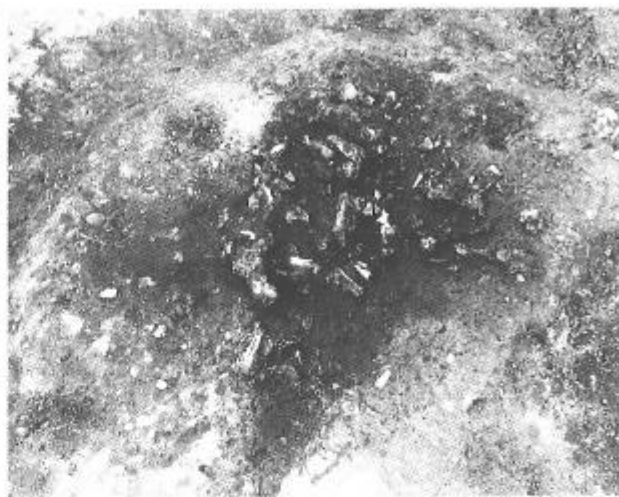
第23図 SX14被火骨出土遺構(西▷)



晩期前葉の羊歯状文が施された鉢形土器である。28はS K 08から出土した土師器杯形土器で、底部回転糸切離しで、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。



第24図 SX15・16被火骨出土遺構(北▷)



第25図 SX16被火骨出土遺構(南▷)



第26図 調査区南端柱穴群検出状況(南東▷)



第27図 SI27出土土器



第28図 SK29出土土器



第29図 SK08A・B出土土器

## 5. まとめ

今回の山王岱遺跡の発掘調査は、昭和62年5月6日～7月14日まで実施され、下記の遺構・遺物が検出され、出土した。調査面積は3,450㎡である。

### 検出遺構

縄文時代	竪穴住居跡 2軒	フラスコ状土坑 1基
平安時代	土坑 3基	竪穴状遺構 1基
時期不明 (中世に属する可能性が強い)	空堀跡 3条	井戸跡 1基
	火葬墓 3基	溝状遺構 2条
	竪穴状遺構 1基	被火骨出土遺構 4基
	土坑 2基	柱穴多数

### 出土遺物

出土した遺物は、コンテナ1箱と非常に少ない。縄文・平安時代の土器が少量ずつ出土している。

〔注1〕「秋田県の中世城館」によれば、山王岱遺跡西端に鎮座する日吉神社地及びその東～北に廻る空堀跡をもって、中世・池内権助の居館跡として、「餌釣館」

の名称が付されている。平面的には南北約120m、東西約85mの矩形の北西部に長さ約45m、幅約25mの張出部が付く単郭のものとされている。これが、今回の調査及び昭和62年7月15・16日に行なわれた範囲確認調査によって、日吉神社を鍵形に囲む空堀の北～東にかけて新たに3条の空堀跡の存在することがわかった。従って、「餌釣館」は、北縁を東西に走るSD09空堀跡とその延長線をもって、平坦な台地の北を限るものと推定できる。それは、南北約400m、東西約300mで、南北方向を高さとする略二等辺三角形を呈する(第3図)ものである。

中世に属すると考えられる3基の火葬墓(SX04・05・13)は、いずれも壙中軸線に直交するような溝状の掘り込みを伴う。この溝状の掘り込みの壁は、壙壁に近い部分では強い火熱のため焼けており、壙と一体の仕事として掘られたものである。壙内で茶毘に付す際の通風施設(注2)の役割を果たしていたものと考えられる。同類の遺構は西日本に多く、京都府長岡京、三重県

(註3) 横尾墳墓群、奈良県谷畑遺跡などに見える。また、被火骨出土遺構としたものは、火葬施設か、あるいは他の場所で火葬・拾骨し、焼土や炭などと一緒に埋納した火葬墓のいずれかと考えられる。

註1 秋田教育委員会『秋田県の中世城館』秋田文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)

註2 (財)長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 1985(昭和60年)

註3 富田勝功・田阪 仁「三重県・横尾墳墓群」『歴史手帖』第14巻11号 1986(昭和61年)

註4 白石太一郎・田阪正昭「榛原町萩原・谷畑中世墓地の調査」『青陵』No24 榎原考古学研究所  
1974(昭和49年)